
やる気ゼロ学生のLAST RUN

静寂の月光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やる気ゼロ学生のLAST RUN

【Nコード】

N5449X

【作者名】

静寂の月光

【あらすじ】

体育祭。

周りの生徒がテンション高く張り切っている中で、俺だけはやる気がなかった。

体育祭を舞台とした恋愛？ものです。

学校の文化祭用にと書いたものを投稿しました。たぶん、誰も見てくれてないので……。

訂正しながら投稿していくので、スローペースでいきます。

part1??やる気ゼロ?? (前書き)

誤字脱字があれば指摘を!

part 1??やる気ゼロ??

九月某日。夏のような日差しが容赦なく照らす。

本来なら、週末で遊び呆けている日曜日に、俺、桐浜雅人は額に汗を流しながら校庭に立っていた。

今、校長が前で体育祭の注意について話している。

そう、校長が言っている通り今日は体育祭。

高校生にもなって、いまさら何を改まって注意する必要があるのだろうか？ などと考え、暇をつぶす。

俺は今日、まったくと言っていいほど乗り気ではない。理由は簡単、運動が苦手なのだ。

そんな俺に比べ、周りのみんなはやる気に満ち溢れている。

それもそのはず。

体育祭と言えば、女子にいいかっこを見せるのに最適な場所。

好きな女子がいる奴はやる気が出ないわけがない。

さらに、今の我が校、橘榛高校にはマドンナ的存在がいる。

ほしかげななか
星風七夏だ。

成績、ルックスともに完璧で、運動もできる。しかも、誰にも分け隔てなく話し、人を嫌うことがない。

さらには、男子全体の九割が入っている非公認のファンクラブまである。まさにマドンナ。ちなみに同じクラスである。

なかなかテンションの上がる状況だ。

あれから五分。

校長の話が終わり、生徒は、それぞれのクラスごとにトラック上半分を囲むように用意されている席??生徒の席と反対側に設置された本部から見て、左が一年、正面が二年、右には三年??に戻る。

その途中、「星風さんに、星風さんに俺のかつこいい姿を!」、「貴様なんぞには星風さんは振り向かんわ!俺に振り向くんだ!」、「なにを言っている、この俺だ!」、などの口論があちこちから聞こえてきた。

俺も星風のことは嫌いではない。

むしろ好きだ。

だが、さっきも言った通り、俺は運動が苦手である。

運動部を含む、生徒のほとんどが本気を出しまくる中、活躍できるわけがない。

俺は早速、この『星風争奪戦』もどきから降りることにした。

体育祭にはふさわしい、すっきりした秋晴れの中、ため息をつきながら自分の席に着く。

「相変わらずやる気なさそうだな、マサ」

競技開始までの間、何をしようかと考えていると、隣の男子生徒、親友の松原爽太まっはらそうたが声をかけてきた。こいつは俺と違い、運動が得意な人間だ。そのため、自信とやる気に満ち溢れている。

俺も爽太みたいに運動ができたらな。

などと、ありもしない空想を思い描きながら、再びため息をつく。

「そっちはやる気すごいな。まさかの星風狙いか？」

「俺はちげーよ。運動できりゃいいんだって。」

「お前はそうだな。確認するまでもなかったわ」

と、苦笑いを浮かべる。

爽太は、運動ができればいい人なのであんまり恋愛に興味がない。

そのおかげで、星風のことを想っている俺ばかりいじられているけど。

応援や罵声の声を聞きながら、普段通り爽太と話していると、第一種目の時間、九時十五分になった。

俺の出番は第三競技の二百メートル走なので、もう少し後になる。正直、めんどい。

そこからは、クラスの奴らを混ぜながら話を続ける。

雑音として、火薬の発砲音に似た音を何度も聞いていると、放送が入った。

「二百メートル走に出る生徒は、トラックのスタート地点に来てください。繰り返します……」

「お、マサの出番か」

「みたいだな。んじゃ、行ってくるわ」

放送がかかり、俺の出る種目、二百メートル走の呼び出しがかかる。クラスメイトに声をかけられながら、席を後にした。

part1??やる気ゼロ??(後書き)

次回の投稿は未定です。

もうすぐテストなので……

part2??二百メートル走??(前書き)

意外と時間があったので投稿。

part2???二百メートル走???

クラスの席からちょうど真反対側にある、本部席。

その前にある競技トラックのスタート地点に、俺は立っている。

先ほどひとつ前の競技、百メートルハードルが終わり、今から二百メートル走が始まるところだ。

橘榛高校はどちらかと言えば田舎の学校だ。

生徒数が少なく、各学年四十人四クラスしかない。

そのため、四人一組で走る。

ライバルは三人。

だが、最初^{はな}つから勝利を諦めている俺は全くやる気がない。

ライバルなど関係ないも同然。

適当に走り、適当に四位をとる事しか頭にない。

「次、さっさと入れ！」

体育の熱血教師が声を大にして生徒を誘導する。

その声のおかげか、はたまた星風のためか、生徒はみんなやる気に満ち溢れている。

……俺以外は。

あんな声、聞いたところで俺の身体能力が上がるわけでもない。したがって、運動ができない俺に教師がなにを言おうと無駄だ。

俺の出番は二年の最後だったらしく、ずいぶん待たされた。

やる気の無さから、適当に運動場を見渡す。

すると、ある人物が目に入ってきた。

星風七夏。

俺の席の近くで友達と楽しそうに話している。

素直にきれいだと思った。

同時にかなり恥ずかしくなった俺は、視線をそらそうとする。が、そらす直前に星風がこちらを見た。

当然目が合う。

一瞬ののち、星風は視線を戻した。

直後、俺の周りに待機している同級生たちが、「今星風さん俺の方見てた!」、「馬鹿言え! 俺だ!」、「何度も言わせるなよ? 俺だ!」、などの口論を繰り広げる。

今まで誰にも振り向かなかったんだ。

体育祭で活躍した程度で振り向くわけがない。

おめでたい奴らだ。

俺は勘違いなんてしない。

期待なんて、するだけ無駄だから……。

そう、心の中でつぶやく。

さっき、無駄に期待した自分に言い聞かせるように。

それから少しして、俺の出番になった。

トラックに入り、横を見る。

運動部をやっているやつばかりだった。

星風狙いからか、目つきが本気マジになっている。

俺は目立たないように走ろう。

そう思いながら、クラウチングスタートの構えをとる。

全員準備ができたらしく、教師の声が聞こえてきた。

「次行くぞ！ 全力で走れよ！」

嫌だっつての。

心の中でそう返すと同時に、ピストルの音が鳴り響く。

その音と同時に走り出した。

スタートダッシュを決めた一番左端、一組の奴が頭一つ抜ける。

やはり、運動をしてるやつらは早い。

それに負けじと、二、三組の奴も必死に追っている。

その比べ、四組の俺は三人から見て後ろから目立たない程度の距離を取り、適当に走っていた。

そのままの順位で、ゴールを迎える。

一位は一組、二位は三組で三位は二組となった。

四組の俺はもちろん四位。

みんな息切れしている中、俺だけ息切れしていないのが適当にや
ったという何よりの証拠である。

ばれないように、少し歩きながら適当に周りを見てみると、星風
がこちらを見ていた。

まあ、向こうがすぐに目をそらしたけど。

同じクラスのよしみでレースくらいは見ててくれたのだから？

そんなことを考えながら、席に戻った。

part2??二百メートル走??(後書き)

誤字脱字等の指摘があればお願いします。

part 3 事件発生 (前書き)

修正に思ったより時間がかかる……

part 3 事件発生

クラスに戻ると、「惜しかったな」、「あのメンバーじゃ勝てないよな、ドンマイ」、などと、クラスの男友達が励ましてくれた。

その通りで、本気を出してはいなかったがああのメンバーでは俺ごときでは勝てない。

励ましてくれた奴らに軽い会釈をしながら席に戻る。

「見事に手、抜いてたな」

「やっぱり爽太にはばれるか」

席に着くや否や、隣の爽太から早速指摘された。

やっぱり爽太には隠せない。

「確かに手は抜いたが、どうせあのメンバーじゃ勝てないだろ？」

苦笑いしながら、当たり前のことを言ってみる。

クラスの奴らも同意したのでこれには同意してくる、と思ったのだが。

「そうか？ マサなら勝てる相手だったぞ？」

「……へ？」

俺は今、とてつもなく変な顔をしているだろう。

そりゃそうだ。

部活ばかりしている、スポーツマンしかいない二百メートル走をろくに運動もしていない俺が勝てると言い出したのだ。

驚きもする。

とうとう夏みたいな日差しに頭でもいかれたか？

それとも、まさかの過大評価か？

無駄に頭を働かせ、暇つぶしに爽太の言ったことについて考えてみる。

突然、彼女にしては珍しい、低い声が聞こえた。

「……桐浜君、どうして全力を出さないの？」

星風が、腰まで伸びた髪を風になびかせながら俺に話しかけてきた。

なぜ俺なんかに話を？

と、考えもしたが、手を抜いていたのに気付いたことも驚きだ。

こればかりは、驚きが隠せない。

しかし、なんで？

「なんで俺なんかに……いや、それより、なぜ手を抜いたことに気付いた？」

「なぜって、見ていたからでしょ？ それより、質問に答えてくれないかしら？」

星風にしては珍しく機嫌が悪い。

いつも笑顔を振りまいている存在だからかなり珍しく思える。

言い方に少しイラッときた。

普通に言えばいいのに、何か喧嘩を売ってるような、そんな言い方。

ふつうに話そうとしたが、低めの声が出た。

「……別にいいだろ。本気を出そうが手を抜こうが結果は同じだ」
「そうじゃないでしょ？ みんな頑張っているのだからま……コホン、桐浜君もがんばってよ」

「俺なんか全力で頑張ったって結果は同じだって。俺なんかにかまってる暇あるなら今走っているクラスメイトを応援してやれよ」

そう言っつて四百メートル走をやっているグラウンドを指さす。

爽太から、「お前……言いすぎだ」と小声で聞こえてきた。

俺もその一声で冷静さを取り戻し、罪悪感を覚えながら星風を見る。

星風が口を開く瞬間、俺たちの話を聞いていたのか、クラスの女子（名前は確か高藤）、が話に入ってきた。

「七夏、そんな奴のことより、タオルタオル！」

「高藤さん、タオルがどうかしたの？」

興味を持った爽太が高藤の話に入る。

星風はむすつとした顔で俺の説教を終える。

なんだ？

このすごい罪悪感は。

「あ、松原君！ 七夏のタオルが誰かに盗まれたの！」

— 大事だった。

高藤の口から出た一言は、俺たち二人が思ってたより、ずっと重い話。

これじゃ、俺が星風に謝るチャンスが流れる。

そう考えたが、すでにタイミングは逃した後。

今更謝る空気でもない。

そう思い、落ち込んでいると、爽太がどんどん話を進めていく。

「どこにあった誰のタオル？ 犯人の目星は？」

「えっと、場所は私達の教室。犯人の目星はないよ。ちらっと見たっていう証言はあるけど」

「どんな特徴？」

気が付くと、俺も話に入っていた。

どうやらミステリー好きの血が騒いだらしい。

俺はこの問題を解決する気だ。

というかそのことしか考えていない。

「えっと、黒い帽子をかぶってて、少し太り気味だったって」

「……はぁー」

目撃証言を聞いた瞬間、二人でため息をつくと同時にやる気が下がった。

太り気味で黒い帽子、星風関係といえれば一人しかいない。

あきれた声で、二人に答えを言う。

「犯人、黒川な」

「……あー」

「黒川君……」

答えを聞いた二人は、あきれたような声でうなだれていた。

黒川は少し前から、こういう問題を起こすようになっていた。

俺やクラスの奴らがさんざん注意を促してきたが……とうとう大きな問題を起こした形である。

だが、そんなことは実際どうでもよく、問題はとうやうていつけるか。

高藤から聞いた話では、すでにファンクラブの皆様が校舎内をくまなく探している。

が、五分ほど経った今も何も連絡が無いらしい。

「少し時間をくれ」

そう言つと、俺は頭の中に学校の校舎全体の図を引っ張り出してくる。

そこから、黒川がよくいる場所、隠れそうな場所を探し出し、携帯を取り出した。

電話帳から星風のファンクラブ会長の名前を引っ張り出し、電話をかける。

ファンクラブは普段ちょっと敬遠気味だが、こういう時は頼るし

かない。

……ファンクラブ星風信者って、怖いんだもん。

抜け駆けしようものなら容赦なく殺^やるし。

会長と最低限の内容確認と、黒川がいそうな場所を教え合い、電話を切った。

だが、本番はここから。

今の電話で分かったのだが、ファンクラブのメンバーが約五分、校舎内を探し続けて見つからない。

ということは、校舎内にいない可能性の方が高い。

今度は校舎内だけでなく、学校の敷地全体の地図を頭の中に引っ張りだした。

そこから、今度は校舎外の隠れそうな場所を探し出す。

今日は体育祭。

ということは……。

「あそこか！」

「っておい！ マサ！」

爽太の声を無視し、全速力で走り出す。

面倒なことになる前に！

走りながら携帯を取り出し、ファンクラブ会長のアドレスを再び引っぱり出す。

手を回しておく必要があるかもしれない。

メールを打ち、携帯の電源を切っておく。

問い詰めてる時に携帯が鳴ると面倒になるからな。

part 4

事件解決

(前書き)

誤字脱字等がありましたら指摘を

part 4 事件解決

息を切らしながら、目的地の体育館倉庫に着いた。

体育祭、校舎外で安全で人の少ない場所なんてここしかない。

俺は、思い切ってドアを開ける。

ドアからの光しか入ってこない真っ暗な中を見ると、予想通りものがほとんどない。

体育祭のため、使う道具は外に出しているからである。

そこに目的の人物はいた。

「黒川！」

「き、桐浜！？ なんでここに！？」

「そんなことはどうでもいい。さっさとタオルを返せ！」

「やだね。これは僕のものだ！ 僕と七夏さんの愛の結晶だ！」

「いつ、とつとつ壊れやがった。

こつなると誰にも手が付けられない。

どうすればいいんだ……。

しかし、七夏たん、さすがに気持ち悪い。

「分かったならさっさとどっか行ってよ。そこに人がいるとばれるじゃないか」

「てめ、犯罪者になりたいのか！」

「犯罪者？ ほくが？ ならないよ、そんなもの」

ダメだ、まったく話が進まない。

一向に時間が過ぎていくだけだ。

俺は作戦を変えることにした。

今は、黒川が自分からものを返すように仕向けているが、無理やりタオルを取り返す形にする。

そうすれば最悪のケース、学校外への逃亡は防げるはずだ。

肝心の取り戻す方法がないわけではない。

しかし……。

「あれしかないか」

そうつぶやくと、ポケットに手を突っ込み、黒川に勝負を仕掛ける。

「黒川、さっさと返せ！ さもなくばこのナイフで斬るぞ！」

俺はポケットから開いた携帯を握った手を抜き、黒川に突きつける。

このために携帯の電源を切っておいた。

俺の言葉に動揺したのか、黒川は、

「な、ナイフだって？ そ、そんな馬鹿な！」

と、おびえている。

今しかない！

そう確信すると、俺は畳み掛ける。

「別に信じなくていいんだぜ？ その場合、俺はナイフでお前を斬るがな」

「や、やめて……」

「ほら、斬れるぞ？」

そういいながら黒川に、開いた携帯を握っている（黒川はナイフとと思っている）右手を突き出し、一歩、また一歩と近づいていく。

黒川は、「や、やめっ！」、「とかん高い声で悲鳴を上げながら後ろに下がっていった。

そのまま壁に突き当たると同時に俺は一言つぶやく。

「もう終わりか。……残念だったな」

「うわぁー！」

耳が痛くなるくらい大きな声で叫ぶと、手に持っていたタオルを投げ捨て、外へと逃げようとする。

が、外には俺がメールで手配しておいたファンクラブの皆が。

「よお、黒川くん？」

あ、捕まった。

そう思った次の瞬間には、すでにファンクラブのみなさまに囲まれていた。

「これで俺の役目も終わりか」

一言つぶやき、黒川が投げたタオルをしっかりと回収して席に戻ることにする。

part 4 事件解決 (後書き)

テストも終わったので少し更新ペース上がるかもです
時間がいまいち取れないので、何とも言えません……

ちなみにテストは惨敗でした……

part 5 パン食い競争 (前書き)

サブタイトル適当です(笑)
　　い　　う　　ほ　　ど　　パ　　ン　　食　　い　　競　　争　　に　　触　　れ　　ま　　せ　　ん

part 5 パン食い競争

自分の席に戻ると、数人の女子が星風と話していた。

どうやら不安がないようにしていたらしい。

急に自分で渡すのが恥ずかしくなり、ちょうど競技から帰ってきた高藤に声をかける。

「悪い高藤、これ星風に渡しといてくれ」

「え？ 自分で渡したらって、桐原君!？」

渡すように頼んでいると、星風がこちらに気付いた。

期待に満ちた顔でこちらを見ている。

無性に恥ずかしくなった俺は、高藤に無理やり押し付け、クラスの席を後にした。

クラスを離れて気付く。

時間はすでに十二時。

お昼である。

タオル事件で集中してて、時間を忘れていた。

幸いにも、午前は二百メートル走だけである。

競技をサボってはいない。

午後の競技は、初めにあるパン食い競争だ。

……食った後に運動する上に食べるのかよ。

ぐったりしながら教室に弁当をとりに行く。

教室で爽太と合流し、弁当を食べた後の、午後一時。

今はグラウンドのスタート地点に立っている。

そろそろ始まる時間なんだが。

みんなが不思議がりだした頃、放送が入った。

「えー今からパン食い競争が始まりますが、ここで参加生徒の皆さんに連絡です」

「なんだ」、「という声があちこちから聞こえてくる。

「このパン食い競争、一番タイムの悪い人は余ったパンの処理をしてもらいませう。以上、皆さん頑張ってください！」

え？

グラウンドの参加者が絶句する中、観客の笑い声が会場を包む。

なんだそのルール。

聞いてないぞ！

「あつ、いい忘れていましたがパンはここ本部で、手伝いなしで食べてもらいまーす！ 逃げられないのでご注意くださいー！」

「は〜!?!」「」

参加生徒全員の声がグラウンドに響く。

その中で俺は一際大きな声を出した。

これ、俺にとってかなり不利だぞ！

心の中でそう叫ぶと、ゆっくりと後ろ歩きをする。

100%負ける勝負、しかも罰ゲームつきを俺がするわけがない。

さっさと逃げるに限る。

「マ〜サ〜？ どこ行く気だ〜？」

振り向き、走り出そうとした瞬間、爽太に肩をつかまれた。

ものすごい笑顔でこちらを見ている。

「ど、どこにも行かないよ？ はは……」

「そうか。がんばれよー」

めちゃくちゃ怖かった……。

苦笑いを浮かべながら、答える。

爽太が怖いので、逃げるのをあきらめて真剣にやることにした。

何かいい方法がないか考えてみるが、特に浮かばない。

体力勝負に作戦無しはしんどいが……。

仕方ない、全力でぶっつけ本番か。

覚悟を決め、スタート地点から勢いよく飛び出す。

part 5 パン食い競争 (後書き)

次回の更新は少し遅れると思います

part 6

問題発生

(前書き)

時間かけた割には文化祭の時と大差ないという……

part 6 問題発生

「助かったー」

クラスの席に戻った俺は、安堵の息を漏らす。

結果から言うと、セーフ。

ただ、なかなかパンを食べれなくてあわや最下位、という結果だった。

今は千五百メートル走をやっている。

これだけは、学年混合で走る競技で、爽太も参加している競技だ。

爽太はこの後、学年クラス対抗リレーにもアンカーで参加する。

ほんとすごい。

ラスト一周というところで、爽太の足取りが怪しくなってきた。

足を痛めたように見える。

ラスト一周の時には三位だった順位が、ゴールの時には七位だった。

ゴール後、そのまま救護テントに運ばれる。

その姿を見た俺は救護テントに駆け込んだ。

「すまんマサ、捻挫しちゃった」

救護テント入ると、右足に包帯を巻いた爽太の姿があった。

話を聞くと、競技中に足を痛めたらしい。

「でもゴールはしてきたから得点は一応あつたらろ？」

「お前、怪我してまで無茶しなくても！」

分かっているつもりだったが、爽太はスポーツの事になるとすぐに無茶をする。

それこそ、怪我をしてまで。

それでもクラスのため、誰かのために必死にがんばる……。

さすがは爽太。

俺にはできないマネだ。

そんなことを考えていると、爽太が真剣な声で話し出した。

「最後のリレーの事だけだよ。マサ、お前に俺の代わりを頼めないか？」

「…………え？」

突然の頼み事に絶句する俺。

いやいやおかしいだろ。

何度も言うが俺は運動が苦手だ。

それは爽太も分かっているはず。

はずなんだが…………。

「どうして俺に？俺より足の速い奴なんていくらでもいるだろ？」

「マサ、まだ気づいてないのか？お前、足速いぜ。それこそ、俺と同じくらいに、な」

信じられない一言だった。

爽太は学年でも足が速い方で、クラスでは一番速い。

そんな奴からの一言だ。

信じられる内容ではない。

「いや、俺には」

「私からもお願いするわ、桐浜君」

断ろうとする俺の言葉を、透き通ったきれいな声が遮る。

声の聞こえた方、テントの入り口を振り向くと、星風が立っていた。

呆然としてみると、星風は爽太に近づき、声をかけている。

内容は爽太を心配したものだった。

硬直から解けた俺は、星風へと質問する。

「星風、お前が何でここに？」

「松原君が怪我をしたって聞いて。そんなにひどい怪我じゃなくてよかったわ。それと……朝は怒ってしまってごめんなさい。あと、タオルの件ありがとう。助かったわ」

「あ、いや、別に……いいけど」

いつもみんなに振りまく笑顔で話す。

ほれた弱み、と言っやつか、まともに星風を見れない。

返事もあいまいだ。

それを横で見っていた爽太が話に入ってくる。

「マサ、照れてないでリレーの答えは？」

「照れてないっての！」

話に入ってきたと思えば半分冷やかしかよ！

と、心の中で突っ込みを入れる。

星風は横で笑っていた。

くっそ、こっちの方が恥ずかしいっての。

「桐浜君、お願いできないかしら？」

「マサ、頼む」

俺が恥ずかしがってる中、二人でアンカーの代わりに頼んできた。

爽太が、今にも土下座しそうな勢いだ。

くっそ、こつも必死に頼まれると断れない。

「……わかった、やるよ。やればいいんだろ？」

俺の返事に、二人の顔色が明るくなる。

こつなったらやけだ。

全力でやってやるさ！

part 6

問題発生

(後書き)

誤字脱字は指摘等を

part 7

last lun 1

(前書き)

物語も終盤です

part 7 last lun 1

「本日の最終種目、学年別クラス対抗リレーに出る生徒は、今すぐ本部前に来てください。繰り返します……」

校庭に放送が流れ、俺は四名のクラスメイトと共に席を後にする。

リレーは五人一組で、一人二百メートル。

しかも、代理というのに俺はアンカー。

正直プレッシャーにつぶされそうだ……。

本部前に着き、他に出る生徒を見渡す。

少しでも情報を手に入れとかないと。

運動ができない分、何とかして補わないといけない。

俺の場合、身の周りにある情報だ。

情報を頼りに、今までもこういう物事をどうにかしてきたんだ。

今回だって。

そう思い、周りを見渡すと、生徒会長の姿が見えた。

リレーの生徒でも仕切るのか？

と思ったが、その腕に生徒会の腕章はない。

生徒会は、自分が出場する種目以外、腕に腕章をつけて生徒を誘導する。

逆に言えば、生徒会も競技参加時は腕章をつけないということだ。

そして今、会長は腕章をつけていない。

会長は、足が速いことで有名で、陸上部部長でもある。

この会長と爽太が、学年ツートップ、と言ったところだ。

そんな相手もいる中でやるのかよ……。

心の中でくじけながらも、他の生徒を見渡し、一息つく。

他にも、何人が注意しないといけないレベルの生徒はいたが、会長ほどではない。

あの人は別格だからな。

自分の中で情報の処理が終わるころには、二年のリレーが始まるうとしていた。

最初に走る生徒がトラックに入る。

いよいよだ。

熱血教師の声が響き渡る。

「次二年！ 全力で走れよ！」

励ましの言葉を投げかけた直後、リレーは始まった。

開始時点では、二組だけが、少しだけ遅れている感じた。

「お、桐原！ 珍しいな、お前がリレーに出るなんて」

と、一人目が半分終わったあたりで会長に声をかけられた。

にしても、誰にでも気さくに声かけるな！。

なんかうらやましい……。

ちなみに会長は遅れている二組だ。

会長は俺の隣に座り、話を続ける。

「爽太の代理さ」

「爽快我したんだっとな。大丈夫なのか？」

「ただの捻挫。そんなにひどくはないけど、やっぱり走るのは無理みたいだ」

第一走者から第二走者へとバトンが移る。

やはり会長の二組が、少し目立って遅れていた。

俺のクラスは現在一位。

このままいけば、ってところである。

「なんか遅れてるけど、大丈夫なのか？」

「元から俺が抜かす作戦なんだ。俺としちゃ、よくやってくれてると思ってるぜ？」

どこまですごいんだ。

感心しながら今の話を聞いていた。

クラスの足の速い代表が集まる中、アンカーがすっぱ抜きする作戦を立てるなんて、そうそうできるわけではない。

それだけで、会長がどれだけ速いのが窺える^{うかが}。

正直、勝てる気なんてしない。

「そう言えば、桐原っていつ走るんだ？ もう第三勝者だが」

「アンカー。なんか押し付けられたけど……会長がいるからだろ」
「れ」

現在、バトンは第三勝者。

差はそんなに開いていない。

どうやら、第二走者ではそこまで差は出なかったようだ。

開いてくれないと俺やばいんだけど。

しかしさつき気付いたが、なんで代理の俺がアンカーをやらされることになったのって、会長のせいだよ。

あいつら、わかってて俺に押しつけやがったな。

最悪だ……。

「いいじゃないか。俺は爽太の代わりにお前でラッキーだぜ？」

「どうせ、楽に抜かせるからだろ？ ひどい話だ」

苦笑いを浮かべながら、走者を見る。

意外にも、俺のクラスが一位だ。

「どうやら俺のクラスは、俺が思ってるより運動ができるクラスらしい。」

最下位の二組との差は、大体三十メートル、と言ったところだ。

そのまま、第四走者へとバトンが渡る。

「さて、俺たちもトラックに入るか」

会長がそう言うところには、全組バトンを渡し終えていた。

「気合を入れながらトラックに入と、みんなそれぞれ、軽い体操等をやっている。」

「最後に、俺のいいところを星風に見せるかな」

隣で会長が、ボソツとそんなことを言った。

会長も星風狙いか。

俺なんかには振り向くわけがない。

ないとわかっているけど。

「会長、俺と勝負しよう。負けたら星風を諦める、でどつっ？」

part 7 last lun 1 (後書き)

次は早めに投稿します

part 8 last lun2 (前書き)

さて、リレーの決着です
雅人は勝てるのか！？

「会長、俺と勝負しよう。負けたら星風を諦める、でどつ?」

気が付くと、俺はそんなことを口走っていた。

周りから、何言っただこいつ、みたいな視線を向けられるが気にしない。

けど、これだけは譲れないのだ。

これくらいの覚悟がないと、星風は俺を見てくれないし、会長にも勝てない。

そんな気がした。

会長は驚いた顔を浮かべている。

が、不敵に笑顔を浮かべ、答えた。

「いいぜ。今、開いている差はハンデな。それくらいししないと話にならない」

軽くうなずくと、俺はクラスの席にいる星風を見た。

最後とあって、必死に応援している。

それを見て、俺は覚悟を決めた。

……絶対に走り勝つ。

まさか、運動の嫌いな俺がここまで真剣に走る日が来るとは。

自分でも夢にも思わなかった。

そう考えると、肩の力が抜けてくる。

たぶん、最初で最後の本気のリレー。

やれることはやってやる。

第四走者が最後のコーナーを曲がり、こちらに来た。

悔いのないように。

そう心で唱えて、バトンを受け取り、走り出した。

最初から本気で飛ばす。

今日すでに二百メートル走を走っててよかった。

大体どのくらいの距離かを把握しているから、始めから飛ばせる。

クラスの方から、「いけー!」、「桐原、頑張れ!」、「などの声援が聞こえてきた。

その声援を背に、俺はさらにスピードを上げる。

半周ほど走り終わると、ものすごい歓声が校庭を包んだ。

おそらく、会長が抜かしまくっているのだろう。

だが、一位は譲らない。

このまま走りきる!

ラスト四分の三というところで、真後ろから足音が聞こえてきた。

会長……ここで追い付いてきたか!

あと少し、というところで追い付かれた。

だがまだ抜かされたわけじゃない。

俺は最後の力を振り絞り、走る。

走ることだけに意識を集中させ、息を荒げながらゴールへと足を動かした。

残り数メートル。

ゴールまで後3秒もないところで、会長が俺の横に並んだ。

もうだめか。

やっぱり、会長には勝てない。

俺なんかじゃ、星風を……。

諦めかけた瞬間、一つの声が聞こえた。

「桐原君、諦めないで！」

星風の一言で、目を覚ました。

そうだ、まだ終わったわけじゃない！

「らあああー！」

俺は声を上げ、全力で走った。

運動嫌いの俺が。

そして、リレーは終わった。

part 8 last lun2 (後書き)

次は少し遅くなると思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5449x/>

やる気ゼロ学生のLAST RUN

2011年11月8日03時16分発行